

## 図書館の徹底活用術⑨

図書館活用の経験を通じた専門性形成  
—Hallの「キャリア形成」に即して—

枝元 益祐

皆さんの学習支援の為の図書館の有用な活用方策についての周辺を毎回紹介をしています。皆さんの学習活動を拡張する拠点である図書館を有効に活用する為の窓口に於けるレファレンスサービスでの「対話」という実践活動や経験を通じた学びに焦点を当てつつ今回は、マイケル・ポランニー (Michael Polanyi) の『暗黙知の次元 (The tacit dimension)』を基にして、「対話」という経験を通して「暗黙知」が生成されることに着眼しました。

今回は、もう一步踏み込んでこの「暗黙知」がどのように専門性に関連するのかに関して説明したいと思います。ところで専門性とは、どのようなものでしょうか。『学研国語大辞典』によると、「特定分野に精通した特殊技能」という説明がされています。類似の概念に、「力量」「職能」「キャリア」などがあります。このように考えると、図書館という学びの場は、図書館資料を駆使するという分野に精通した図書館員による学習支援の場であり、この支援を根拠で支えるものが、図書館員の専門性・力量・職能・キャリアなどであると考えられます。当然、こういった能力は固定化されたものではなく、その状況に応じて柔軟に変容するものであり、その変容の範囲の広さ、換言すると、利用者のニーズに合わせて提供するサービスも変化させていくことも専門性の一部であるということが出来ます。

では、こういった能力はどのようにして形成されていくのでしょうか。例えば、司書課程を修了し図書館司書資格を取得すれば、それだけで一人前の能力がその身に宿っているのでしょうか。そうではないはずです。やはり実践活動という経験の中からの学びを通して形成される能力であると考えるのが自然のほうです。しかも唯、経験を積みさえすればそれでいいという

ものでもないはずで。

ハル (Hall, D. T. *Career in and out of Organization*. Sage Publications, Inc., CA, 2002) によると、「キャリア」とは一般に「一生涯に渡る仕事関係の経験や活動と共に個人がとる態度や行動の連なり」と定義されています。Hallは、企業内の昇進や地位といった伝統的な「キャリア」に代わり、仕事に於ける心理的な成功や満足感を重視する「protean career (変幻自在のキャリア)」という概念を提唱しています。

ここで重視されるのは、その仕事に対する役割や価値観、興味、能力といった個人のアイデンティティ形成と状況への柔軟な対応です。換言すると、固定化された業務内容を如何に合理的に達成するのかといった側面ではなく、そこに人間形成的側面である学習者個人の内面の有り様が大きく影響すると捉えているということが出来ます。

このHallの考えに即して説明すると、図書館員の専門性やキャリアは、単なる業務遂行能力というのではなく、人間的な内面の在り方がその能力形成に影響するということであり、学習支援者である図書館員もまた学習する主体であるということが出来ます。だからこそ、利用者と共に学び成長する共同体の一員として学習支援が成立するということが出来ます。図書館でのサービスや「対話」を、そういった利用者と共に学び成長しようとする実践活動の経験の一部として意識することで、みなさんたちの学習の中で図書館がより一層、身近な存在として感じて貰えると思います。

図書館での「対話」がみなさんたちの学習の扉を開け、その先にある大きな学びの世界へ誘う入り口になるはずで。

えだもと ますひろ (准教授・図書館学・教育学)